



フィリピン拠点 超短期派遣

平成26年9月1日～平成26年9月10日

東京工業大学 グローバル人材育成推進支援室

目次

1. 海外派遣プログラムの目的	3
2. 参加者の紹介とプログラム日程	4
2-1. 参加者の紹介	4
2-2. 派遣プログラム日程	5
3. フィリピンの概要	9
3-1. 基礎データ	9
3-2. 政治体制	9
3-3. 産業の基礎情報	10
3-3-1. GDP	10
3-3-2. 貿易	11
3-4. マニラの地理	12
3-5. 社会文化的象徴	13
3-5-1. 治安	13
3-5-2. 交通機関	13
3-5-3. 人柄	14
3-5-4. 食文化	14
4. 訪問先の詳細	15
4-1. デラサール大学について	15
4-1-1. キャンパスの概要	15
4-1-2. ワークショップ	16
4-1-3. 学生交流	16
4-1-4. その他	16
4-2. 企業訪問と工業見学	17
4-2-1. CPhとEEIについて	17
4-2-2. マニラパシグ・マリキナ河川見学について	21
4-3. フィリピン国立博物館について	22
4-4. JICAフィリピン事務所とPHIVOLCSについて	24
4-4-1. JICAの概要	24
4-4-2. ユニカセの概要	25
4-4-3. PHIVOLCSの概要	26
4-5. フィリピン大学ディリマン校	27
4-5-1. キャンパスの概要	27
4-5-2. 学生交流	27
4-5-3. その他	28
5. その他	29

5-1. 食事	29
5-2. 街の様子	31
5-2-1. 観光	31
5-3. その他	33
6. 所感	34

1. 海外派遣プログラムの目的

本プログラムはグローバル理工人育成コースの下記の 4 つのプログラムのうち、4) 実践型海外派遣プログラムの一環として実施された。

- 1) 国際意識醸成プログラム：国際的な視点から多面的に考えられる能力、グローバルな活躍への意欲を養う。
- 2) 英語力・コミュニケーション力強化プログラム：海外の大学等で勉学するのに必要な英語力・コミュニケーション力を養う。
- 3) 技術を用いた国際協力実践プログラム：国や文化の違いを超えて協働できる能力や複合的な課題について、制約条件を考慮しつつ本質を見極めて解決策を提示できる能力を養う。
- 4) 実践型海外派遣プログラム；自らの専門性を基礎として、海外での危機管理も含めて主体的に行動できる能力を養う。

グローバル理工人育成コースにおける実践型海外派遣プログラムは、上記 1) から 3) のプログラム履修後に学生を海外に派遣し、現在まで育成された能力を活用し、自身の今後の研究やキャリア形成の参考となるような経験を積むことであり、本コースの集大成として位置づけられている。

実践型海外派遣プログラムは、次の 3 つの能力の育成を目指す。

- 1) 自らの専門性を基礎として、異なる環境においても生活でき、業務をこなす力を持ち、窮地を乗り越えるための判断力、危機管理能力を含めて自らの意思で行動するための基礎的な能力を身につけている。コミュニケーション力と自分の考えを説明できる表現力が向上する。
- 2) 異文化理解が進み、相手の考えを理解して自分の考えを説明できるコミュニケーション能力、語学力、表現力を身につけている。異文化理解が進み、語学力が向上する。
- 3) 海外の様々な場において、実践的能力と科学技術者としての倫理を身に着け、チームワークと協調性を実践し、課題発見・問題解決能力を発揮して、新興国における科学技術分野で活躍するための基礎的な能力を身につけている。

フィリピン拠点超短期派遣は、今回初めて実施された。本報告書は、グローバル理工人コースに所属する参加者 6 名による、現地の活動の記録である。

2. 参加者の紹介と派遣プログラム日程

2-1. 参加者の紹介



機械科学科 4年
飯田 亮一



高分子工学科 3年
吉岡 柚香



化学工学科応用化学コース 3年
西山 奈菜



情報工学科 2年
加田 匠



情報科学科 2年
大橋 耕也



1類 1年
鈴木 圭介

2-2. 派遣プログラム日程

日付	行動予定	訪問内容
9月1日 (月)	羽田発—マニラ着 15:15- 両替 18:00- 夕食 (Max Chicken), 買い物 (Shoe Mart)	羽田空港集合 ANA NH869 羽田 9:55 発→マニラ 13:30 着 両替, ホテル到着
9月2日 (火)	デラサール大学カンルーバンキャンパス (Science and Technology Complex)見学 10:00 pick-up from the hotel using Coaster to DLSU Canlubang 11:30 orientation and lunch in DLSU Canlubang 12:30 observation of DLSU complex school 14:00 departure from DLSU Canlubang 15:00 visit to People's Park in the Sky (Palace in the Sky) in Tagaytay 17:30 arrival to hotel	東工大フィリピンオフィス (Tokyo Tech Office Philippines) Prof. Ronaldo S. Gallardo,
9月3日 (水)	デラサール大学マニラキャンパス見学・講義 8:50-9:00 Pick-up in Orchid Garden Suites c/o CES (Civil Engineering Student) 9:00-9:30 Tokyo Tech Philippines Office 9:30-10:00 Courtesy Call (Ronnie Sensei & Vice President, Edwin Santiago) 10:00-11:00 Campus tour c/o CES (Civil Engineering Student) 11:00-12:00 Library Tour 12:00 -14:00 Lunch 14:00-15:00 ECE Laboratory tour c/o Dr. Lawrence Materum	Professor of Department of Civil Engineering / Advisor of Tokyo Tech Office http://www.dlsu.edu.ph/

<p>9月4日 (木)</p>	<p>企業訪問・現場見学 (国際開発工学フィールドワークと合流)</p> <p>5:30 Meeting at lobby</p> <p>6:00 Pick up by bus</p> <p>7:00 Arrival at CPh office</p> <p>7:00-7:30 CPh presentation by Mr.Tanaka</p> <p>7:30-8:00 Office Tour by Mr. Tanaka, GM and CM</p> <p>8:05 Departure from CPh office to 1st Site</p> <p>9:00-11:30 1st Site (Metrobank Center Phase 1 Project) Visit</p> <p>12:00-13:00 Lunch Time at Max's Glorietta, Makati</p> <p>14:00-15:00 2nd Site (Beacon 3 Project) Visit</p> <p>15.30 Arrival to Hotel</p>	<p>Chiyoda Philippines http://www.chiyodaphil.com.ph/</p> <p>EEI Corporation http://www.eei.com.ph/</p>
<p>9月5日 (金)</p>	<p>デラサール大学講義参加・キャンパス見学・在学生との交流 (国際開発工学フィールドワークと合流)</p> <p>7:30 Meeting at lobby</p> <p>9:00 participation to 2014 Seminar Workshop on the Utilization of Waste Materials (plenary session)</p> <p>12:00 lunch in workshop place</p> <p>13:00 campus tour with DLSU students</p> <p>16:00 library tour</p> <p>18:00 reception party & student presentation</p>	<p>(上に同じ)</p>
<p>9月6日 (土)</p>	<p>マニラパシグ・マリキナ河川工事見学</p> <p>8:30 Meeting at lobby</p> <p>9:30-10:00 Orientation in office of construction</p> <p>10:00-11:30 Boat trip on Passig river for observation of construction</p> <p>12:00-14:00 Lunch and shopping in Mall of Asia</p>	<p>日本企業受注の河川工事見学 (担当:国際開発工学・西田助教)</p> <p>http://www.themindmuseum.org/</p>

<p>9月7日 (日)</p>	<p>フィリピン国立博物館及びイントラムロス見学 10:00 Meeting at lobby AM National Museum Lunch & PM Intramuros</p>	<p>http://www.nationalmuseum.gov.ph/</p>
<p>9月8日 (月)</p>	<p>JICA フィリピン, ユニカセ, Phivolcs 訪問 8:30 Meeting at lobby 10:00-11:15 JICA フィリピン事務所訪問 11:45-13:30 昼食 Uniquease (社会的企業) 14:30-16:30 技術協カプロジェクト「フィリピン地震火山監視能力強化と防災情報の活用推進プロジェクト」カウンターパート (Phivolcs) 訪問</p>	<p>http://www.jica.go.jp/philippine/office/ http://www.uniquease.net/ http://www.phivolcs.dost.gov.ph/ (C/P 中村様)</p>
<p>9月9日 (火)</p>	<p>フィリピン大学ディリマン校訪問 7:30 Meeting at lobby 9:15 Meeting at UPD 9:15-9:30 Welcome students from Tokyo Tech @College of Engineering Steps 9:30-10:00 Short video presentation about UP Diliman @Faculty Lounge 10:00-11:30 Interactive activity with engineering students (self introduction, games, etc) Discussion with engineering faculty (for senior staff) @Faculty Lounge 11:30-13:30 Lunch @Technohub 13:30-13:45 Return to UP 13:45-17:00 Tour in UP</p>	

	<p>*Campus Site Visit I (Walking Tour with UP students)</p> <p>Meet-ups with student Japanese organization</p> <p>Academic Oval</p> <p>Visit to Bulwagan ng Dangal or Vargas Museum</p> <p>Snack at Kiosks (“Food Stalls”) with students</p> <p>*Campus Site Visit II (via van or e-Jeep)</p> <p>NCTS → Dormitories → Gym → Oblation → Jacinto St. (AGT) Science Complex → via NIB → Vinzon’s Hall → Univ. Health Service (Infirmary) → Shopping Center</p> <p>Photo-op with Oblation</p> <p>Souvenir shopping in UP Shopping Center</p>	<p>Prof. Maria Antonia N. Tanchuling, Professor of Institute of Civil Engineering</p> <p>http://www.upd.edu.ph/</p>
<p>9月10日 (水)</p>	<p>マニラ発ー羽田着</p>	<p>ANA NH870 マニラ 14:00 発→ 羽田 19:55 着 羽田空港解散</p>

3. フィリピンの概要

(執筆担当：大橋耕也)

3-1. 基礎データ



フィリピンの位置

- 正式名称： フィリピン共和国
- 面積： 299,404 km² (日本の約 80%) 7,100 余りの島々から成る
- 人口： 約 9,671 万人(2012 年) 世界第 12 位の人口
- 首都： マニラ 人口約 1,155 万人
- 公用語： 英語とフィリピン語
- 通貨： PHP 1 = 2.35 円 (2014/08/20)
- 宗教： 総人口の約 90%がキリスト教 (そのうち約 8 割がカトリック) ASEAN 唯一のキリスト教国 その他イスラム教が約 5%

3-2. 政治体制

- 政体： 単一国家 大統領制 立憲共和制 アメリカと類似
- 元首： ベニグノ・アキノ 3 世大統領
2010 年 6 月 30 日に就任 愛称はノイノイ

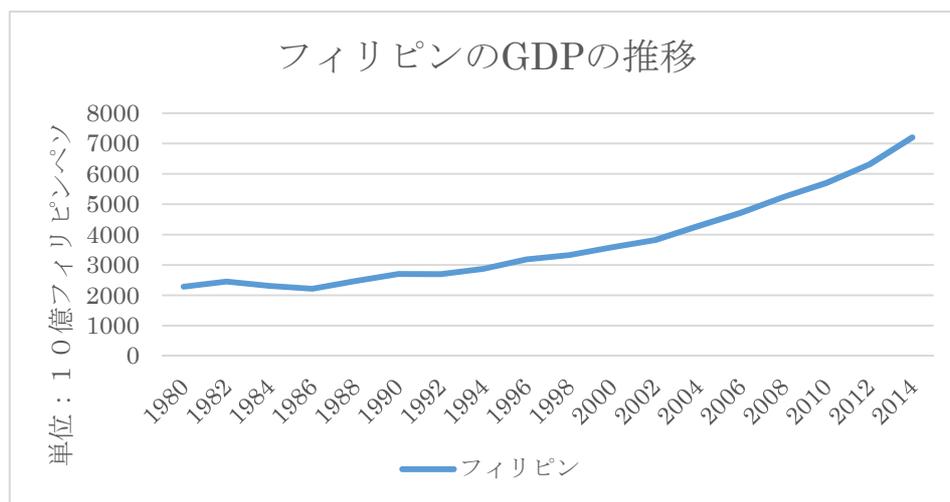


- 国会： 上・下二院制。上院は 24 議席、任期は 6 年で、連続三選は禁止されている。下院は最大で 286 議席、任期 3 年で、連続四選は禁止されている。下院の 286 議席のうち、小選挙区の議席が 229、政党リスト制(比例代表制)が最大 57 議席
- 内閣： フィリピンの内閣は、大統領、副大統領、官房長官、報道官、国家経済開発庁長官等の他に 19 の省の大臣から構成される。
- 政党： 多党制

フィリピンの政治の大きな特徴は、政党間で特に大きな理念の違いが無い上に、どの政党が勝っても結果的には大統領の属する政党が最大与党となってしまう、つまり大統領の政治的権力が極めて大きいことだ。大統領は様々な権限を持っているため、議員が何かをしたいときは大統領に近づくことが必要となってくる。したがって、どの政党で当選しようと、当選後に大統領の属する政党に移る議員がとても多い。結果的に大統領の属する政党が最大与党になってしまうという仕組みである。大統領が持つ権限は、具体的には、行政統括権、条約締結権、予算案を含む法案の拒否権等非常に広範囲に及ぶ。

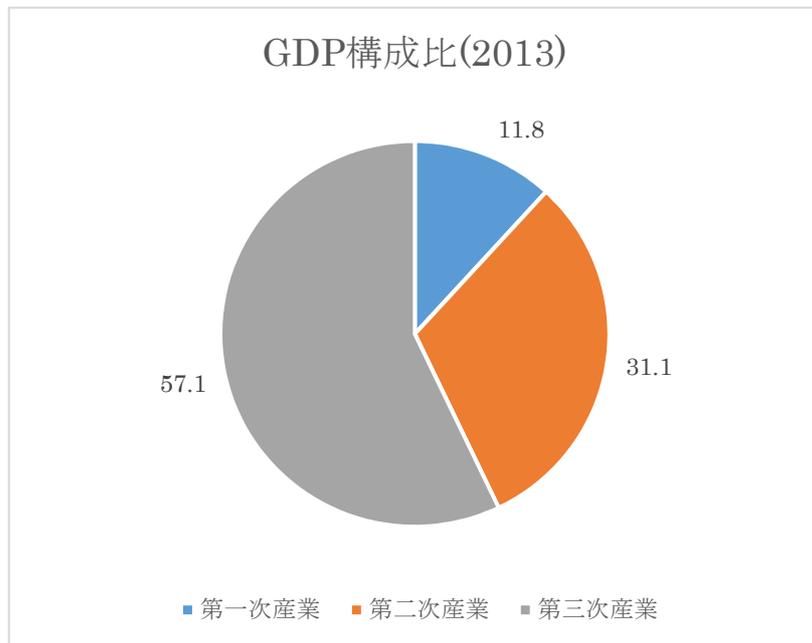
3-3. 産業の基礎情報

3-3-1. GDP



参考：http://ecodb.net/country/PH/imf_gdp.html

グラフからもわかるように、近年フィリピンのGDP成長率は高く、2012年には成長率6.6%と目標を上回る成長をし、2013年には、成長率7.16%に達し、**世界188ヶ国中20位の成長率**を誇った。



参考：<http://ecodb.net/country/PH/economy/>

フィリピンの主な産業は、電子機器の組み立て、衣料品、靴、医薬品、化学品、木材製品、漁業から成る。

GDP 構成比からわかるように、フィリピンは第三次産業の占める割合 57.1% と高い。具体的には、通信や金融、小売り、住宅・不動産サービス等によって産業が支えられている。またその他にも、フィリピンでは比較的高い教育が受けられ、かつ公用語が英語のため、英語圏向けのコールセンターや BPO 産業（ビジネスプロセスアウトソーシング）が大きく成長し、2011年には64万人を超える雇用を産み出した。

3-3-2. 貿易

輸出品目	電気機器および同部品 33.4% 委託加工用の原材料で製造した完成品 10.4%
輸出相手国	日本 19.0% アメリカ 14.2% 中国 11.8%
輸入品目	鉱物性燃料 22.5% 電気機器および同部品 14.4% 委託加工用の原材料 11.1%
輸入相手国	アメリカ 11.5% 中国 10.8% 日本 10.4%

参考：<http://ecodb.net/country/PH/trade/>

フィリピンの貿易構造は、電子機器の半完成品を輸入し、それを加工して輸出するとい

う中間貿易が主流である。電子機器に次ぐ輸出品目は、ココナツ油やバナナといった果物を中心とする農産物、鉱物などがあげられる。フィリピンの貿易相手国として日本が非常に大きな存在であることは上の表から明らかであり、フィリピンと日本の結びつきの強さがわかる。

3-4. マニラの地理

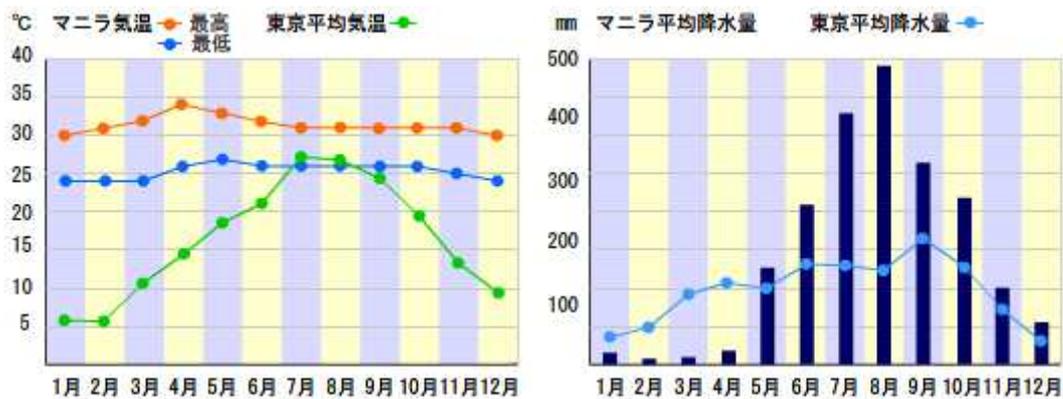


マニラの位置

フィリピンは一年を通じてあまり気候の変化が無い熱帯モンスーン気候で、年平均気温が約27℃。大まかに乾季と雨季に分かれている。

- 乾季（11月～5月）
雨が少なく、特に3～5月はホットドライと呼ばれ最も暑い時期となる。対して、11～2月は、クールドライと呼ばれ、湿度も低く比較的過ごしやすい。
- 雨季（6～10月）
雨季といっても日本の梅雨のように毎日雨が降り続くことは少ない。午後や夕方に一時的なスコールがある程度。ただし、その雨の激しさは日本の豪雨の比ではない。

我々は9月にフィリピンを訪れるが、不運なことにフィリピンでは9～10月に台風が最も多く発生している。毎年台風による被害は大きく、マニラがあるルソン島に集中することが多い。



グラフからも、雨季と乾季の雨量の差が読み取れる。一方、気温の変化は小さい。

3-5. 社会・文化的特徴

3-5-1. 治安

日本の治安の良さは言うまでもない。そんな安全な国で育ってきたからこそ、訪問国の治安について知る必要がある。まず、これはフィリピンに限ったことではなく世界の常識だが、自分自身の安全は自ら守ったり、お金で買うものとされている。では、実際フィリピンは日本に比べてどの程度危険な国なのだろうか。国連の世界の犯罪に関する調査曰く、殺人・強盗・強姦においてその発生率は日本の数倍である。しかし、世界的にみて日本が異例なほど安全な国であるだけであって、強盗・強姦においては、フィリピンはアメリカ等の欧米諸国にくらべてその発生率は極めて低い。殺人率を除けばフィリピンは欧米諸国より安全といえる。

3-5-2. 交通機関

日本にも馴染みのある交通機関として、鉄道、バス、タクシー等も利用できる。しかし、フィリピンの主な交通機関は、ジープニー（右図）と呼ばれるもので、人々の相乗りバスのようなものである。フロントガラス、または車体の横に行き先が記されていて、手を上げれば止まってくれる。



3-5-3. 人柄

フィリピン人はとても大らかでフレンドリーな性格をしている。その大らかさゆえか、特にセブに住んでいる人々は、プライベートでは集合時間に30分遅れることも珍しくない。また、何か問題が起きたとき、とりあえず笑うほど楽観的である。

3-5-4. 食文化

主食は日本と同じくお米。他の東南アジア諸国は辛いものを好むのに比べて、フィリピンの料理はスパイシーなものはあまりなく、味付けは醤油や酢を使うことが多い。フィリピンに行くならぜひ食べておきたいものに、ハロハロ（右図）というものがある。アイスクリームやゼリー、ナタデココなどが入ったスイーツで、価格も1つ100円くらいでリーズナブルでもある。



4. 訪問先の詳細

4-1. デラサール大学について

(執筆担当：鈴木 圭介)

4-1-1. キャンパスの概要

デラサール大学 (DLSU) は1911年創立の私立大学であり、キリスト教カトリック系の学校である。スクールカラーは緑であり、今回の派遣中に私たちが訪れた Manila キャンパスと Canlubang キャンパスについても、屋上の色が緑であったり、ガラスの色が薄い緑であったりと緑色が多く使われていたように思う。以下では簡単に両キャンパスの特徴および感想を述べる。

<<Manila キャンパス>>

15階建ての図書館を中心としたキャンパスで、白を基調にした、西洋風の建物が多かった。マニラ中心部にあるキャンパスで、近くを電車が通っているなど交通の便は良さそうであったが、私たちと交流した学生の中では大学の近くに住んでいるという方も多かった。キャンパス全体が柵に囲まれており、関係者以外は入れないようになっているが、キャンパス内は閉鎖的な感じはせず、芝生が広がっているところもあり、昼休みはそこで休憩している学生もいた。



Manila キャンパス 図書館

<<Canlubang キャンパス>>

51ha もの広大な敷地を持つキャンパスだが、建物はあまり多くなく自然が広がっている。キャンパスは都心部から離れていて、電車なども無いので、学校側が通学バスを用意している。今は大学付属の幼稚園から高校としての役割が大きく、大学生は少ないとのことであったが、自由に使える実験スペースがあり、学生が自由研究で



Canlubang キャンパス MILAGROS R.DEL ROSARIO BU

きるなど、設備は充実していた。

4-1-2. ワークショップ

デラサール大学で行われたセミナーに参加することができた。午前の部と午後の部があったが我々は午前の部のみに参加し、いくつかの研究成果を聞いた。セミナーということもあり専門用語が多く使われていたので意味が理解できないこともあったが、海外のセミナーの雰囲気を知ることができた。セミナーの雰囲気はとても自由で、好きな時に席を離れたり食事をしたりしている光景も見られた。



4-1-3. 学生交流

Manila キャンパスでは土木工学科の学生の方々と学生交流を行った。9月3日の午前中、キャンパスの案内をしてくれた後、一緒に昼食を食べた。デラサール大学にも食堂はあるが、外で昼食を食べる学生もいるようで、Jollibee という現地でメジャーなファーストフード店に行った。食後、みんなで話をしたがフィリピンの学生にも日本のアニメは人気な様であった。本プログラムの中で用意された交流の機会は以上であったが、メンバーの1人が連絡先を交換したため、その後も夕飯を一緒に食べたりすることができ、またボウリング、カラオケなどを楽しんだ。

4-1-4. その他

デラサール大学から少しはなれたところにある大型ショッピングモールのモールオブアジアでデラサール大学の学生らしき人をよく見かけた。私たちが遊びに誘ってくれたときの移動手段も基本的にタクシーであったから、デラサール大学の学生は放課後に遊ぶ際、車を用いて遠くに行くことが多いのではないかと思う。



9月5日 歓迎パーティーにて

4-2. 企業訪問と工場見学

(執筆担当：大橋耕也)

4-2-1. CPh(Chiyoda Philippines Corporation)とEEIについて

《概要》

C P hとは、千代田化工建設の海外主要関連会社のことである。E E Iは現地のゼネコンで、C P hとE E IはもともとC&Eという合併会社を成していたが、現在ではE E IがC&Eから撤退し、C P hは完全な千代田化工建設の主要関連会社になったという経緯がある。

C P hは、主にメトロマニラにおけるプラントの詳細設計を業務としている。その中でも今回我々は、Metrobank Center Phase1 project (ホテル建設) の見学に行ってきた。

E E Iは、フィリピンを代表するゼネコンの一つである。その業務は多岐に渡り、病院、空港、学校などの建設にも携わっている。今回我々はBeacon3 project の見学に行ってきた。



C P h のホームページ

<http://www.chiyodaphil.com.ph/>



Beacon3 project

《見学の様子》

Metrobank Center Phase1 project に関する説明を受けた後、実際の工事現場の見学をした。最初に下の写真にある、工事用エレベーターで建設中のビルの最上階に移動した。工事が終わったら取り外すエレベーターなので作りが簡易で、風が吹くと揺れたりしてとても怖かったのを覚えている。



説明を受ける様子

最上階から、徐々に下に降りていきながらの見学だった。下に行くほど完成度が増していき、ホテルの客室やトイレはほぼ完成していた。水回りの設備完成の優先順位が高い印象を受けた。他にも、ビル建設には欠かせない耐震構造等の説明も受けた。



工事用エレベーター



最上階からの景色



見学の様子



上下の揺れ対策

午後にはE E I の Beacon3 project の見学に行った。午前のC P h の見学に比べて、ここでの滞在時間は短く、簡単な説明と実際の工事現場の見学で終わった。説明をする場所が工事現場のすぐ隣ということもあって、所々聞こえず理解できないところもあったが、実際に工事をしている人を見てビル建設がどのように進んでいくのかを知ることができた。

私たちが見学に行ったときには主に、コンクリートを様々な器具を使って平らにする作業を行っていた。30分ほど見学をしていたが、徐々に平らになっていく様子を見ることができた。



コンクリートを平らにする様子



説明の様子

SCHEDULE OF CONSTRUCTION SITE AND CPh OFFICE VISIT

rev 0 9/1/2014

FINAL

Date of Visit : 4-Sep-14	THURSDAY	
No. of Attendees : 42 persons	(See attached List of Attendees)	
Time Schedule :		
1) Pick up TIT and DLSU students at Hotel		at 6.00
2) Arrival of TIT and DLSU students at CPh office		at 7.00
3) CPh presentation to TIT students (by Mr.Tanaka)		from 7.00 to 7.30
4) Office Tour (by Mr. Tanaka, GM and CM)		from 7.31 to 8.00
5) Departure from CPh office to 1st Site		at 8.05
6) 1st Site(Metrobank Center Phase 1 Project) Visit *		From 9.00 to 11.00
7) Lunch Time (at Max's Glorietta, Makati)		12.00 to 13.00
8) 2nd Site(Beacon 3 Project) Visit *		From 14.00 to 16.00
9) Arrival to Hotel/CPh office		around 17.30/18.30

Construction Site : 1) 1st Site

@ Metrobank Center Phase 1 Project

Location : Corners 8th Ave., 35th St., 7th Ave, 36th St. Fort Bonifacio Global City, Taguig (see attached map)

Schedule of visit : 9:00AM~11:00AM

Contact person(1) at site : Mr. Jess Parada-AVP Operations

Mob no. : (0908)477-2845

E-mail address : jpparada@eei.com.ph

Contact person(2) at site : Mr. Bong Sustiguer-Construction Manager

Mob no. : (0908)490-9678

E-mail address : amsustiguer@eei.com.ph

2) 2nd Site

@ Beacon 3 Project

Location : Chino Roces, Arnaiz Street, Makati City (see attached map)

Schedule of visit : 14:00~16:00PM

Contact person at site : Engr Edwin Sta Maria – Project Manager

Mob no : (0917)801-3317

Direct line no : (02)846-6210

E-mail address : erstamaria@eei.com.ph

Car Arrangement : CPh to arrange a bus for 42 persons.
(Mr.Villalon will depart for hotel at 5:00AM from CPh)

Lunch : CPh to arrange lunch for 42 persons after the 1st Site Visit.

Hotel Address : IDE/CV students and leader (25 persons) stay at hotel as follows:

Orchid Garden Suites Manila

Address: 620 Pablo Ocampo Sr. Street Malate,
Manila , Philippines

Tel nos : (632) 708-9401 up to 14

Fax no. (632) 708-9416 up to 17

<http://www.orchidgardensuites.com.ph>

Attachment : List of Attendees
Locaton Maps
Safety reminders

Location map - Metrobank Project

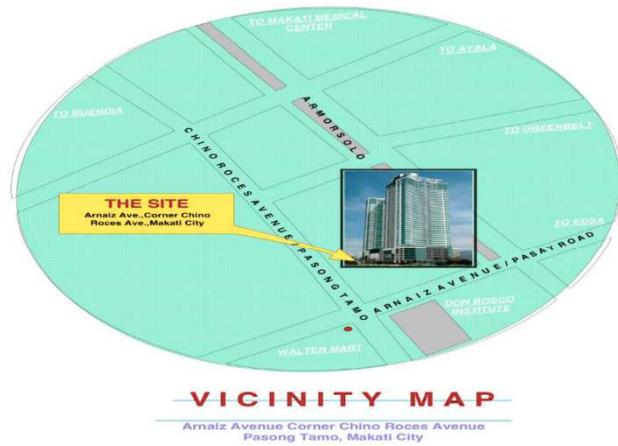
3 / 5



Location of Beacon 3 Project

4 / 5

LOCATION/VICINITY MAP



4-2-2. マニラパシグ・マリキナ河川見学について

フィリピンは世界で最も自然災害の多い国の一つであり、特に台風などによる洪水が甚大な被害をもたらしている。洪水被害を少しでも緩和しようと国内で多くの工事が行われているが、我々が今回訪れたのはマニラパシグ・マリキナ河川の工事現場である。主に堤防の整備を行っていた。

河川工事に関する説明を受けたが、その中で印象に残っているのは、河川沿いに不法に住んでいる人たちの対応だ。工事を進めるには、その人たちに移動してもらう必要があるそうだが、簡単に移動はしてくれず、対応が難しいそうだ。実際に船に乗って河川工事の進み具合を見学することができたが、確かに多くの人が河川沿いに家を建て住んでいた。

河川には多くの水草が浮いていて、船のモーターに絡まってしまうこともあった。その他にも、河川警備隊もいたりして、工事の様子以外にも学ぶことが多かった。



不法住居



大量の水草



未整備状態



整備状態

4-3. フィリピン国立博物館について

(執筆担当：吉岡柚香)



私たちが行ったのは、**The National Museum of the Filipino People** といい、国立博物館の別館に当たる。主にフィリピンの民族学、考古学に関する展示がある。フィリピンの文化を一日で知ることができる。ヘリサール公園に面した中央入口から入ると、そこは3階建ての博物館の2階にあたる。この階にはフィリピンにおける水中考古学の最近の成果が3つのギャラリーに展示されており、そのうち2つは、オランダとの海戦で沈められたサンディエゴ(**San Diego**)号というスペイン船から引き上げられた遺物が展示されている。特に印象に残った展示は次の3つである。

(1) Pina Barong

パイナップルの葉で作られた民族衣装は **Pina Barong** と呼ばれていて、パイナップルの葉の繊維で作られている。



(2) 絶滅種

見たこともない生物の展示も多く、今は絶滅またはその危機に瀕しているものも多い。博物館を通じて、絶滅危惧種などを展示することで、何かしら見物者が感じ取れば・・・そのような思いが博物館の意図にはある。



(3) 土器

果てしない数の土器がおかれていて、合わせて 1400 点存在する。



スペイン船のサンディエゴ号についての展示などが、フィリピンの博物館で大きく取り上げられているが、はじめはスペインの物を展示することに対して疑問を感じた。しかし、たとえスペインの遺物であっても、フィリピン国内で発見された以上フィリピンの歴史の一部であり、フィリピン人としてのアイデンティティ確立のための文化遺産として、その歴史的意義を認識していこうという深い意図がそこには隠されていたといえる。

フィリピンは、過去にスペインに植民地にされたという経験をもつ国である。スペインがかつて植民地宗主国としてフィリピン諸島の人びとを 4 百年にわたり支配してきた事実を消し去ることなく、受け入れていこうとする姿勢が見て取れた。

渡航前の予定ではフィリピン国立博物館の他にもう一つ、マインド科学館に行く予定であったが、予定日に河川工事見学ができるとのことでとても貴重な経験なのでそちらを選びマインド科学館は中止にした。

4-4. JICA フィリピン事務所と PHIVOLCS について

4-4-1. JICA の概要

(執筆担当：西山奈菜)

JICA とは独立行政法人国際開発協力機構の英語名称 Japan International Cooperation Agency の頭文字をとった略称であり、日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関である。今回は JICA のフィリピンにおける活動拠点であるフィリピン事務局を訪問した。



JICA はフィリピンに限らず、世界各地で活動している。それらの活動に共通する理念は「開発途上地域等の経済及び社会の開発若しくは復興又は経済の安定に寄与することを通じて、国際協力の促進並びに我が国及び国際経済社会の健全な発展に資すること」即ち、被支援者に限らず日本国民も含めすべての人々が恩恵を受けられるようなダイナミックな開発を行うことである。

フィリピンはかつて他の ASEAN の国々の経済成長に取り残され、多くの問題を抱えていたが、2013 年度の GDP 成長率は 7% を超えるほどの急激な経済成長を遂げ、ASEAN のなかでも成長株として注目されるようにまでなっている。

しかし依然として多くの課題を抱えており、今後の成長の課題として、防災や経済競争における行政システムの未熟さ、電気や交通などのインフラ開発が途上であること、国内における生産性の高い産業の不足が挙げられている。

これらを受けて対フィリピン国別援助方針では「フィリピン開発計画の「包摂的成長」を支えていく」ことが掲げられている。また重要分野として、「投資促進を通じた持続的経済成長」「弱性の克服と生活・生産基盤の安定」「ミンダナオにおける平和と開発」の 3 つが挙げられている。

紹介して頂いた支援事例の中に LRT (Manila Light Rail Transit System) の整備への円借款があった。この LRT には日本の企業の車両が採用されている。この事例で特徴的なことは、後にもう一つの路線を整備する際、同様に日本の支援を受けたいとフィリピン側から要請があったことである。鉄道などの技術支援は他国からの支援申請も存在していた。その中で日本に再度要請があったというのは、LRT における日本の技術や支援がフィリピンに受け入れられた証拠である。この例のように JICA の支援事業は被支援国からの要請を受けてから支援が行われる



ものである。JICA という団体が、ただ支援を与えるというよりも、フィリピンの成長を支えともに歩もうとする団体であるように感じられた。

4-4-2. ユニカセの概要

JICA 訪問後、私たちはユニカセというレストランでジェネラルマネージャーの中村さんの話を30分ほど聞き昼食を食べた。ユニカセとは、路上生活や人身売買など様々な危険にさらされた子どもたち (Children at risk) の数を減らすことを目的に2010年にフィリピンで設立された社会的企業であり、実際にユニカセで働くスタッフは全員もともと Children at risk であった人たちであった。中村さんと一緒にトレーニングをして、今では中村さんがいなくても店を回せるまでに成長した人もいるとのことであった。店の中にはアクセサリ等が売っているコーナーがあり、それは現地スタッフの人が空いた時間に作ったもので、自分が作ったものが売れたらその利益は自分の給料に加算されるとのことだった。メニューも現地スタッフが考えているとのことだ。やはり、ここまでのビジネスをこなすには相当なトレーニングが必要なようで途中で辞めていく人も少なくないらしいが、自ら辞めたいと言わない限り中村さんは決して見捨てたりしないとのことだった。中村さんの社会貢献に対する姿勢にただただ感心するばかりだった。



4-4-3. PHIVOLCS の概要

(執筆担当：飯田 亮一)

PHIVOLCS とは Philippine Institute of Volcanology and Seismology の頭文字をとった略語であり、日本語に訳すと“フィリピン火山・地震研究所”となる。今回見学させていただいたのはフィリピン大学ディリマン校の敷地内にあるメインオフィスだ。

フィリピンは東側のフィリピンプレートと西側のユーラシアンプレートが交わる地点に位置するため、日本と同様に火山・地震活動が活発であり、PHIVOLCS は地震・津波・火山噴火やその他の地殻現象の状況を監視・研究し、それらが発生した際は国民に情報提供を行い災害被害の軽減を図る、また災害予想エリアを公開するなどして経済・産業の発展のサポートをする、といったことを目的とする国家機関である。日本では同様の役割を気象庁が主に担当している。JICA との共同プロジェクトも行っているように日本とのつながりは強いようで、所内にはいくつか日本語のポスターも見受けられた。

オフィス内には監視中の火山や地震計の観測データをリアルタイムで表示するモニターがいくつも設置されており、異常が検知されたら専門家チームを現場に派遣するのだという。火山・地震研究所ということで地質学のエキスパート集団と思い込んでいたが、火山の例では噴出ガス中の硫黄濃度の測定など化学的なアプローチも行っていたり、市民向けのイラスト入りでわかりやすい地震対応マニュアルを作成していたりと、非常に手広く国民の安全のために日夜(監視は文字通り 24 時間体制で!)活動している。



PHIVOLCS のメインオフィス



4-5. フィリピン大学ディリマン校

(執筆担当：加田 匠)

4-5-1. キャンパスの概要

フィリピン大学は1908年創立のフィリピンを代表する国立大学である。創立当初はマニラとロスバニョスが拠点で、学生数が100人に満たなかった。しかし20年ほど経ってその数が急増したため、フィリピン政府がディリマンに広大な土地を買収することになった。第二次世界大戦時には日本軍が侵攻し建物を占拠したという経緯があり、キャンパスの拠点がディリマンに移されたのは終戦後のことである。現在は全部で15のキャンパスを有しており、そのうち7校が構成大学、1校が自律大学である。

そんなフィリピン大学だが、2012年の学生数は少なくとも57000人で、そのうちの約半数をディリマン校が占めている。東工大の学生数が大学・大学院生合わせても10000人程度であるから、大学の規模の大きさが窺える。また、女子学生の割合が男子学生のそれよりも高いというのが興味深い。実際にキャンパスツアーをしたとき、デラサール大学のときが徒歩だったのに対して、フィリピン大学のときはバス移動であった。キャンパス内には売店が小さな商店街のように連なっていたり、トラックが何台も停車していたりと、キャンパスの広さに関して日本の大学とスケールが違っていた。



ユニバーシティ・アベニュー

ディリマン校の学部はcluster というもので4つに大別されており、東工大の類よりもかなりざっくりとした分類である。その内訳は Arts and Letters , Management and Economics , Science and Technology , Social Sciences and Law となっていて、文理全体から幅広い学問分野を選択することができる。ちなみに学生交流のときは全員理系の学生だったので、女子学生はあまり見られなかった。

4-5-2. 学生交流

フィリピン大学で講義を受けることはなかったが、現地学生30~40人と一緒に簡単なゲームを行った。私たち日本人1人に対して現地学生5~6人のグループをそれぞれつくり、

封筒に入った紙を引いてそれに書かれた質問に答えていくというものである。わずか10分ほどの短いゲームだったが、グループに日本人が自分だけなので、英語でどうにかして話をつなげるのに苦労した。おそらく私以外のみなさんも自分の英語力についていろいろ思うことがあったであろう。これをバネに今後の語学学習の原動力にしていきたい。

その後はキャンパスツアーを案内して下さる方々と一緒に昼食をとった。フィリピン大学を訪問する前にデラサール大学を訪れたが、学生の雰囲気の違いを垣間見ることができた。デラサール大学の学生が明るく活発なのに対して、フィリピン大学の学生の方は良い意味で落ち着いているという感じであろうか（そうは言っても個人個人で差があるので一概に各大学の学生像を決めつけることはできない）。簡単な英語を使いながら、大学生活などについていろいろ話すことのできる有意義な時間であった。



学生交流にて



キャンパスツアーの方々と

4-5-3. その他

プログラムの8日目に Phivolcs を見学したときはフィリピン大学に少し立ち寄ることができ、そのときにリニアモーターカーの実験設備をバスの窓越しに見ることができた。正式に訪問したのは9日目のみと、たいへん短いものであったが、現地の学生やアシスタントの方など、多くの方々にお世話になった。交流を通じて、お互いに連絡先を聞いて facebook の友達になることができた。今後とも交流を継続するようにしていきたい。

5. その他

5-1. 食事

(担当：吉岡柚香)

フィリピンの食事としてまず代表的なものは、ローストチキンである。基本的に肉料理が多く、スパイシーで味が濃い。どれも 300 ペソほどで食べることができる。

(ローストチキン)



また、全体的に甘い味付けか、スパイシーな味付けが多く、スープ類には酸味の効いたものが多い。

(シニガン)・・・酸味のきいたエビのスープ



(カレカレ)・・・こってりとしたシチューに似たスープ。ピーナッツソースで作る。



次に、代表的なスイーツについて紹介する。下の写真はブコパイといって、タガタイなどの地域の銘菓である。ココナッツの果肉がぎっしりと詰まっていて、ほどよい甘さに抑えられている。



次の写真はハロハロという、フィリピンのかき氷である。上のアイスは紫芋を使って、様々なトッピングがかき氷の上に乗っている。これを混ぜて食べるのが主流で、初めは食べ方が分からず上から食べていたためにとても美味しいと思えなかったが混ぜて食べると、紫芋のアクセントが聞いていて、非常に美味しい。

(ハロハロ)



全体的に味が濃いのが、慣れてしまうと病みつきになるものばかりであった。フィリピンの料理は基本的に味が強いものが多いため、大皿で頼んで大勢で分けて楽しむのが良いだろう。

5-2. 街の様子

(執筆担当：飯田 亮一)

右はマニラの街の様子を象徴する1枚だ。都市部は急速に開発が進み、場所によっては日本と変わらないほどに都会的な街並みが見られる一方、そこから目と鼻の先には写真手前に見られるようなバラックが立ち並ぶ。ほんの短い滞在の間でもこのような貧富の差を感じる機会は多々あった。しかし同時に、至る所で工事が行われ日々発展していく活気も感じられた。



公用語はフィリピン語と英語であるが、街中の標識や看板、書店で売られている書籍は英語がほとんどだった。一方で現地人同士の会話はフィリピン語の方が多用されていたように思う。

滞在中、日本を感じた場面がいくつかあったが、その最たるものが車だ。行き交う車の多くが日本車だったのは驚きだった。元々中古車を安く仕入れていたらしいが、最近は新車も増えているのだという。確かに滞在中利用したタクシーはきれいなものばかりだった。しかしながら物価の安いフィリピンであっても新車価格は日本と大差無いようで、新車を買えるのはまだまだ富裕層に限られるようだ。



マニラにはショッピングモールが数多くある。中でも私たちが訪れたモールオブアジアはフィリピン国内2位、世界でも9番目に大きい(2014年9月現在)ショッピングモールで、有名ブランドが多数店舗を構え、ボウリング場や映画館、スケートリンクといった娯楽施設をも含む日本では考えられないほど巨大な商業施設だ。モール内にはユニクロや無印良品といった日本企業の店舗もあり、映画館では邦画も上映されていた。

5-2-1. 観光

1) サン・アグスティン教会 (イントラムロス)

イントラムロスにはスペイン植民地時代に作られた城塞都市で、第二次世界大戦中、日本軍がフィリピンを占領した時の拠点とした場所である。同教会は唯一第二次世界大戦を耐えぬいた建物で、現在は世界遺産に指定され観光名所となっている。見学した併設の博物館にはキリスト教の宗教画などが数多く展示されている他、墓所もあり厳粛な雰囲気だった。西洋風の石造りの建物に囲まれると一瞬自分がどこの国にいるのか分からなくなるが、庭の植物がここが南国であることを思い出させてくれた。



サン・アグスティン教会



教会中庭より

2) タガイタイ

デラサール大学カンルーバン校見学の帰り道、山道をしばらく進みタガイタイに立ち寄った。標高約 700m のところにあるピープルズパークインザスカイという公園は熱帯に属するフィリピンとは思えないほど快適な気温だった。曇っていたためはっきりとは見えなかったのが残念だったが、晴れていればタール湖という火山噴火によりできた湖が一望できるとのことだ。公園内の建物はかなり寂れており柵も一部崩れていた。元々迎賓館として建設されていたものが未完成のまま放置され、現在は高台として利用されているのだそうだ。



5-3. その他 (交通事情、治安、挨拶)

(執筆担当：加田 匠)

《交通事情》

フィリピンでの移動手段は主に車である。大学生でも車で通学するというケースが少ない。その一方で、交通ルールは日本と比べてかなり甘い。前方の車に割って入って車をどんどん抜こうとしたり、横断歩道がほとんど見られなかったりしたのは驚いた。道路を横断するときには行き交う車の中に入って堂々と歩かなければならない。歩行者を見て車がちゃんと止まってくれるので一安心した。

また、フィリピンではジープニーという乗り物を街中でよく見かける。乗合バスのような存在で、電車のように車後方に横向きに座る。料金は距離にもよるが 10 ペソほどであり、そのハイカラな外見が印象的。



《治安》

私たちが訪れたマニラなどを含め、フィリピン全体として治安状況は決して良いとは言えない。派遣中は先生方や現地学生と行動することがほとんどだったので実被害は出なかったものの、夜道を歩くときはリュックを前にして歩くよう先生から注意されたり、路上の物売りから話しかけられたりと、ところどころに危ない要素が感じられる。また、ショッピングモールに入るだけで荷物検査があった。危険な場所や時間帯を認識して行動することが必要である。

《挨拶》



公用語は英語とフィリピン語であり、現地の人どうしだとフィリピン語で会話することが多い。こちらが英語で挨拶してもまあ何の特徴もないという感じだが、今回デラサール大学の学生から2度にわたって簡単なフィリピン語を講義していただいた。「こんにちは」は“Magandang hapon マガンダン ハポン”、「ありがとう」は“Salamat サラマツト”等々、といったところである。発表や

会話のときに一言盛り込むと現地の人に喜ばれることが分かった。渡航前に少しフィリピン語を覚えていくのもありだなと思った。

6. 所感

“ここに来る前にフィリピンに対して抱いていたイメージは何ですか？” 現地の学生から実際に聞かれた質問だ。不勉強で恥ずかしい限りだが私には“セブ島とバナナ” くらいの知識しかなかった。しかし発展途上国といいながらも都市部には高層ビルが立ち並び、日本と大差ない街並みがある。一方で、そのすぐ目と鼻の先にはスラム街もある。日本から約3000km と比較的近い国であるにもかかわらず知らないことばかりだった。出発前のある程度の情報はインターネットで仕入れたものの、やはり実際に行ってみなければ分からないことが山ほどあり、貴重な経験をする事ができた。

私の中での今回の派遣プログラムの目的の一つが自身の語学力を試すことだったため、できるだけ積極的に英語を話そうと努力をしたが、知らない単語や意味がパツと思いつかばない単語があるとなかなかコミュニケーションがうまく取れず、もどかしかった。それでもなんとか理解しようと拙いながらも質問をすれば、必ず相手も分かるように答えてくれる、そんなことが幾度となくあった。日常会話ではそれでも何とかやっていけるかもしれないが、これが中長期の留学で講義を受けたり発表をしたりを日常的に行わなければならなくなった時、やはり今の語学力では足りないことを痛感させられた。滞在中、現地学生と交流する機会が多々あったがもっと英語が話せればもっと彼らと仲良くなれただろうしより深い異文化理解が進んだのだろうと今では感じている。これをバネに英語学習を進め、次の機会に活かしたい。

今回のプログラムの中でたくさんの大学・機関・企業等を見学させていただき、現在進行中の計画や将来の展望など、発展著しいフィリピンの明るい面を垣間見ることができた一方、ストリートチルドレンやゴミ山で生活せざるをえない子どもたちや、現地の方から見ても悪いという交通状況など、フィリピンの抱える問題点もうかがい知ることが出来た。これらは単なる観光旅行では知り得ないことばかりだったと思う。短い滞在ながら非常に密度の濃い時間を過ごすことができた。この派遣プログラムの参加をきっかけに、より世界への興味が高まった。大学院進学後の留学を目標にこれから準備をしていきたいと思う。

(飯田 亮一)

派遣プログラムを受けようと思ったきっかけは、世界と日本の感覚がどれくらい異なるのかを、実際に足を運んで体験したいとおもったことから始まる。実際にフィリピンは日本と違い、治安が悪くて犯罪が多いし、貧富の差も激しい。日本のようにきれいなトイレは存在しない。そして何よりも日本と違ったのは、同じ世代の学生たちの雰囲気である。フィリピンの学生たちにまず言われた一言。‘Don’t be shy!’ 日本人は基本的に人見知り

で、他人と話すことに消極的であるが、フィリピンではそんなことを言っていたら生きていけない。人とコミュニケーションを取ることこそ重要であり、私たちの「恥じらいの文化」は時としてマイナスに働くことを実感した。また、ほとんど見知らぬ人に対して東工大の紹介をプレゼンテーションした時には、非常に緊張したものの、他人に伝える力を身に付けられたと思う。将来は外資の大手企業を目指す関係上、英語力は不可欠の要素になるが、フィリピンで得た一番の収穫は、英語について、どれだけ文法がでたらめでも相手は一生懸命意味をくみ取ってくれるし、堂々と話せばかならずわかってくれることがわかったことである。重要なのはリスニング力。自分の言葉は相手にジェスチャーなりで伝えられるが、電話などの対応では人の口の動かし方が見えない状況で英語を聞き取らなければならない。その時にどうしても聞き取れない場合は会話が繋がらないのである。これから先力を入れていきたいのはやはりリスニング力であり、今後もフィリピンでの経験を生かし、よりリスニングを強化していきたい。

(吉岡柚香)

私は海外での経験を積むことを主目的に今回のプログラムに参加しました。今まで日本からでたことがありませんでした。そのため将来海外に長期滞在をしてみたいという考えはあっても不安が先立ち、具体的なイメージを持つことは出来ていませんでした。プログラム中では一人で行動することこそなかったものの、街を自分の足で歩き、買い物や現地の学生や店の人などと交流し、10日間生活することができました。文化の違いや治安、衛生面で戸惑うこともありましたが自分なりに環境に適応し、日本との違いを楽しむことができたように思います。今回の経験のおかげで、将来フィリピンに限らず海外で生活することへの不安、抵抗感が減り、進路選択の視野が広がったように感じられました。

また英語やその他の学習面でも今回の経験は有意義でした。以前までは英語での交流には全く自信がなく、言葉が分からないというより発話することへの抵抗感が先立ってしまっていたのですが、使わざるを得ない状況になり、自信のないままでも積極的に話すことでコミュニケーションをとることはできるのだと実感できました。同時に、語彙やリスニング能力の不足も実感し、これからの英語学習に向けての指針を得ることができました。

このプログラムを選択した理由である、普通の個人海外旅行とは違った経験がしたいという希望に、このプログラムはとても適していたと思います。現地の学生との交流、フィリピンの観光客向けではない課題も含む側面など、留学ならではの学びと経験を多くえることができました。得られたものをこれからの学生生活や進路にも生かしていけるよう大切にしていきたいと思います。

(西山奈菜)

高校1年のときに初海外で中国にホームステイしてから4年が経ち、今回の派遣ではフィリピンを訪れることになった。最初、フィリピンは世界の中でもあまりメジャーでない国だと勝手に思っていたが、10日間と短い期間ながらも多くのことを学ぶことができた。

まずフィリピンの雰囲気について、まだ発展し始める直前という印象を受けた。大きなショッピングモールがある一方で、路上で物売りをしている貧しい人々を何度も見かけた。また、私たちが宿泊したホテルの水道、電気といったインフラ設備も不安定なことがあった。そのような決して良い環境とは言えない中でも、フィリピンの人たちは陽気で明るい人が多かった。日本は先進国特有の問題が山積していてあまり明るい将来をイメージすることができないが、その反面、世界に目を向けると急速に発展して勢いづく国もあるのだと肌で感じることができた。これからはさらに視野を広くして物事を考えるようにしていきたいと思う。

また、現地学生との交流が印象的だった。プログラムの内容からして交流する機会はあまりないと思っていたが、デラサール大学の学生が毎日のように夕食や遊びに誘ってくれた。私の英語が拙いせいでもあまり大層な会話はできなかつたものの、学生が主体となって異文化に触れることができたのは非常に有意義な経験である。来年はデラサールの学生が日本に来る予定とのことなので、今度は私たちが日本の案内をするとともに、その頃までにはもう少し流暢に英語が話せるよう語学の勉強も続けていきたい。

最後に、今回の派遣では、引率の先生方、現地の学生、国際開発工学科のフィールドワークの学生など、多くの方々にお世話になりました。ありがとうございました。

(加田匠)

新興国の雰囲気、学生交流。フィリピンでの10日間を通して、この2つが私にとって印象深いものだった。

新興国の雰囲気、特に貧富の差には驚いた。ストリートチルドレン、車道で歩き売りをする人等々、貧困層の人たちは生きるのに必死という印象を受けた。すぐ近くで車が猛スピードで行き来し、インフラ整備が追い付いていない不衛生な環境の中彼らは必死にお金を稼いでいた。雨が降っても遮るものがないのか、びしょ濡れのまま立っていた。そんな人たちの、お世辞にも立派とは言えない家のすぐ近くに高級ホテルや私立大学、大きなマンションが建っていた。貧富の差という言葉はあらゆるところで耳にはいたが、実際に自分の目でその現状を見たのは初めてで、言葉では表せないような衝撃を受けた。

学生交流では、デラサール大学の学生が私たちを毎晩のように食事に誘ってくれたり、遊びに連れて行ってくれたりと、とても楽しい交流ができたと思う。デラサールの学生だけでなく、他にも多くの人と交流をする機会があったが、やはり自分の英語力の低さは認

識せざるを得なかった。特にリスニングは今後の大きな課題の一つだと思う。現地の人たちはそんな我々にも積極的に話しかけてくれたりと、とてもフレンドリーだった。来年にデラサールの学生たちが日本に来るそうなので、今度は私が日本について案内したいと思う。

上の2つ以外にも多くのことをフィリピンで学ぶことができ、同時に日本という国を見つめなおすこともできた。グローバル化社会では、自分の常識が通用しない。だからこそ、自分の国の特徴をとらえておく必要があると思えた。10日間と非常に短い期間ではあったが、私の今後の人生において間違いなくプラスに作用すると思う。このプログラムを通して、かけがえのない仲間を作ることができました。ありがとうございました。

(大橋耕也)

私が、今回の派遣でまず感じたことは話そうとすることの大切さであった。派遣されてすぐ、デラサール大学の学生と交流することとなったのだが私は何を話せばいいのか分からず、また自分の英語が不安で話せずについて、何度も Don' t be shy と声をかけられた。結局、まともに会話できたのは9日目くらいだったが、途切れ途切れの英語でもきちんと耳を傾けて、自分が何を言いたいのか考えてくれたので、もっと伝えようと努力すべきであった。次に、フィリピンの貧富の差を実際に見て私が思っていた以上に現実には過酷なものであると思った。フィリピンでは、日本と同じ様にあまり不自由なく暮らせている人が多くいる一方、道端では、ぼろぼろの服に裸足で座っている人も見かけた。このような状況を打開するのは時間やお金もかかるだろうし、何をすべきかも明確ではないだろう。しかし、私はせめて、JICAの募金に協力するなど自分にできることをやろうと思った。また、フィリピンの学生は体力があると思った。私たちはデラサール大学の学生と交流してからはほぼ毎晩一緒に出かけて食事をし、遊んだ。もちろん私たちはくたくたに疲れて、プログラムの移動中はほとんど寝るような有様だったが、向こうの学生はいつも元気そうであった。フィリピンの人は陽気だとよく言われるが、このように体力があっても元気であることもその要因のひとつではないかと思う。今回の派遣で私は自分の無力さを痛感した。そもそも英語能力が足りてなかったし、疲れていて聞き流してしまった部分もあった。1人ではどこにも行けなかつただろう。しかしこの経験から、私に足りないものや改善すべき点を再認識することができた。次に海外に行くときは、もっと主体性を持って動けるだろう。このような点でこの派遣プログラムはとても有意義なものとなったと思う。

(鈴木圭介)